今井町の町並調査

建造物研究室

今井町の調査が年報で報告されるのはこれで6回目である（'69～'72，'77年）。今井町については，1955年関野克氏を代表とする調査が建築関係では最初と言ってよく，当時すでに個々の民家だけでなく都市としての今井が対象とされている点は注目される。'69～'72年に当研究所が行ったものは，環濠内建築（主屋）の悉皆調査であり，町並の性格を把握するための連続立面写真撮影，屋根伏作成等から住民の意識調査も行われ，歴史都市保存開発構想の必要性が認識されるにいたった。

'77，'78年調査は歴史的環境保全市街地整備計画の為のもので，これは国土総合開発事業調整費による文化庁，建設省の共同事業で行っているが，文化庁側の実際の調査は日本設計事務所が受け，当研究所と大阪市立大学建築学教室がこれに協力して行っている。このうち当研究所の担当は主として保存整備計画に向けての評価基準の設定の基礎となる建築を建築群，街区，街区群の現状及び歴史的発展，文化財的価値についての調査である。

調査地域は御堂筋，本町筋，中町筋についての'69～'72年調査を一層徹底すると共に，全戸の断面，復原図を作成した。また敷地ないし街区の性格と変遷を摑むため，道路に面したすべての建築の立面と今井町の南北断面実測，さらに古図，地籍図，古文書等を調査した。

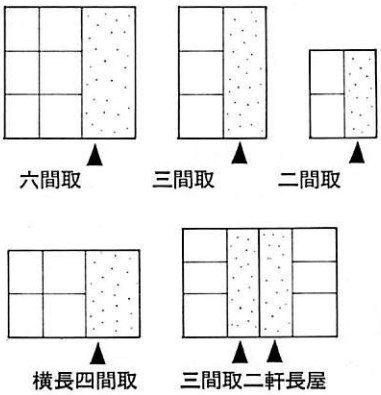
調査対象（主屋）の年代の分布　調査対象のうち主屋についてみると伝統的な町家は178棟で，年代と旧状が概略解るものが166棟あり，そのうち106棟が独立主屋，60棟が長屋である。その年代的な分布は17世紀4棟（推定が多い，以下同様），18世紀前半5棟，同後半18棟，19世紀の文政末年迄20棟，それ以降幕末迄38棟，明治45棟，昭和戦前迄34棟，戦後2棟である（戦後でも広い意味で伝統的なものは含むことにした）。

平面型式と年代との関係　平面型の主なものは図に示した通りであるが，各型の遺構と年代の関係は以下のようになる。

2列6室型　大型町家の典型的平面型で，大型の2列5室や7室以上の家もこの系統とみられるから，17世紀中頃には既に成立し，以後明治まで続いた安定した型である。ほとんどの家が2階建で背が高く，今井町の町並景観上重要な役割を持っている。

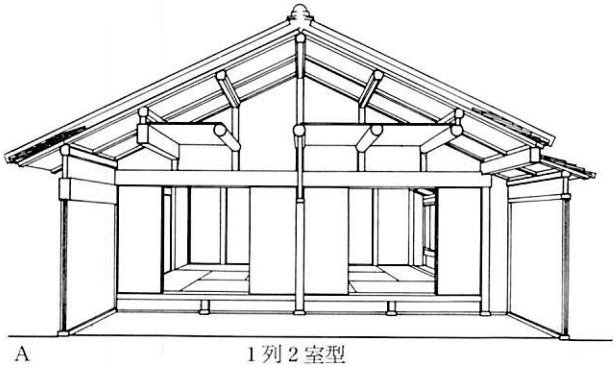
2列4室横長型　農家の四間取に似た平面で，この系統は10棟以上あり，18世紀前年から各時期に分布しているから，特殊な型でないことは明らかである。

1列3室型，1列2室型　前者が20棟，後者10棟で文化，文政頃の1列3室型を上限とする。



今井町町家平面類型

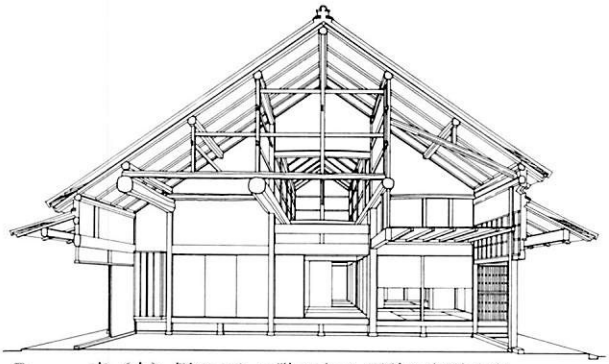
長屋１列３室型，長屋１列２室型（図省略）調査主屋中前者が21棟，後者が35棟ある。年代の上限は共に18世紀末頃であるが前者は幕末，後者は明治の遺構が多い。これらは独立住宅の１列３室，１列２室を２ないし５単位連ねた型であるが，同一間取をくり返すものと大小の住居単位を結合させたものがある。



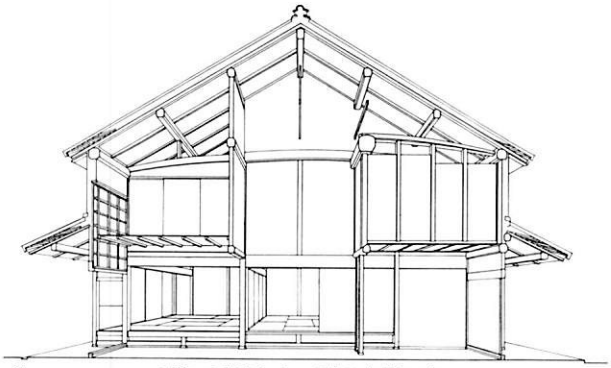
A　　１列２室型

平面形式間の問題点

1.　２列６室型は大型町家の基本型で全国に分布しているが，これは１列３室型から発展して成立したといわれ，系統的なつながりを実証できる地方も多い。今井町でこれが否定されたわけではないが，もう一つの前身型として横長の２列４室型も想定することができる。これは横長２列４室型から２列６室への改造例，又は建替例により示唆される。奈良の平野部の街村に多い横長４間取の家が今井町にあっても不自然ではないし，それから本格的な町家への発展が今井町で確かにあったかどうか今年度以降の調査で確認したいところである。



B　　表（右）側につし２階のある２列６室型の家



C　　２階の発達した１列３室型の家

2.　１列３室型について独立主屋と長屋とを比べると，後者の方が規模がやや小さく，構造，部材は細くて耐用年限の点で不利な筈なのに古い遺構がみられる。調査した遺構は今井町の一部に過ぎないので断定できないが，１列３室型は独立主屋よりも長屋に先行した可能性があり，少くとも古くは長屋に多くみられた型と言えそうである。

（吉田　　靖）

（断面パースは建築を土間側からみたもの，大阪市大作図による）